

Niigata University

2009年早春号

No.170

新大広報

特集1

旅立ちへの思い

～新潟大学へのメッセージ～

特集2

学生座談会

～4年間を振り返って、後輩たちに伝えたいこと～

学長からのメッセージ

CAMPUS INFORMATION

第57回 卒業制作展



Message

■ ■ ■ 学長からのメッセージ

平成21年早春、新潟大学を卒業される皆さん、大学院を修了される皆さん、
ならびに新潟大学を退任・退職される皆様に、心からお祝いを申し上げます。

■ ■ ■ 卒業、大学院修了を祝して

我が国の次代を担う、前途有為な卒業生ならびに大学院修了生を送り出すことができますことは、私たち新潟大学の大きな誇りと喜びであります。皆さんは、この新潟大学を離れて、実社会に飛躍される方が多いと思いますが、志を高くもって、自らの目標に向かって、果敢に挑戦してほしいと思います。

この度の新たな出発にあたり、将来への希望と共に、いくばくかの不安もあるかもしれません。皆さんには、新潟大学で身につけた高度で専門的な知識と技術、広い教養に支えられた知性、それに若さという強力な武器により、自信をもって社会の中で活躍してほしいと願っています。そのためには、失敗をおそれずに、失敗から学ぶ勇気ある挑戦をつづけ、まわり道があっても、夢に向かって進んで下さい。

今まさに世界的金融危機からの経済不安のなか、皆さんはこれからの生き方を真剣に考えていると思います。皆さんには、主体性を持って自らを律して行動する自律と責任を自覚し、高い倫理性を身に付け、積極的に社会を支えていく気概をもっていただきたいと願っています。21世紀は、自然環境、人口、食料、エネルギーなど、解決しなければならない課題を抱えています。皆さんの力によって、これまでとは違った新たな考え方、新たな仕組み、新たな価値を創造することが期待されているのです。

皆さんには、多くの可能性が与えられていますが、何より大切なことはあくまで自分との約束を守り、常に学ぼうとする努力を心掛け、実行することでしょう。皆さんの前途に幸多かれと祈念いたします。

■ ■ ■ 退任・退職を祝して

退任・退職される教職員の皆様は、永年にわたり本学に奉職され、それぞれのお立場において立派にお勤めいただきました。これまでの本学の発展にご尽力されたことに対し、心からの敬意と感謝の意を表するとともに、お祝いを申し上げます。

近年の国立大学をめぐるのは、大変厳しい環境にあり、特に5年前の法人化移行時には、新しい制度設計等に対応すべき多くの課題が立ちふさがり、言い表せないほどの大変な負担がありました。しかし、皆様の絶大なるお力をいただいたお陰で今日の新たな国立大学法人新潟大学が築き上げられてきたと思っております。

新潟大学は、今後ともその使命である教育・研究・社会貢献活動の一層の充実に努めて参る所存です。皆様におかれましては、これからも本学に対するお力添えとご支援の程を宜しくお願い申し上げます。

3年前(平成18年4月)に、本学の発展と会員相互の親睦を目的として、全学同窓会が結成されました。その目的に沿って、本学との懇談・交流会や講演会等を開催するなど、活発な活動が次々と展開されておりますことは、誠に喜びに堪えません。

同窓会活動を含めた様々な形で本学に対し、ご支援とご協力をお願いしたいと思います。どうぞ折にふれて母校・新潟大学を訪れ、恩師、先輩、同級生の皆さん、同僚等との絆を大事にする機会を持っていただきたいと願っております。新潟大学は、皆様にとりまして心のふるさと(故郷)でありたいと、これからも、いつでも、皆様に扉を開いていたいと思っています。

最後に、この度人生の区切りを迎え、新たに出発される皆様方を、あらためて祝福申し上げますとともに、健康には充分ご留意され、お元気でご活躍されますことを願って送別の辞といたします。



失敗をおそれずに、
失敗から学ぶ勇気ある挑戦をつづけ、
まわり道があっても、
夢に向かって進んで下さい。



新潟大学長

下 條 文 武

GEJYO, Fumitake

特集

旅立ちへの思い

～思い出と決意を胸に～

卒業・修了する学生からのメッセージ

人文学部情報文化課程 p4 酒井 淳

教育人間科学部学校教育課程 p4 佐久間 史信

法学部法学科 p5 山本 淳

経済学部経済学科 p5 柳 沼 大 介

理学部物理学科 p6 長 島 正 幸

医学部医学科 p6 三 浦 健

医学部保健学科 p7 島 田 真 至

歯学部歯学科 p7 石 坂 淳 子

工学部建設学科 p8 中 澤 晶 子

農学部農業生産科学科 p8 二 木 明 日 香

大学院保健学研究科 p9 澤 田 杏 子

大学院現代社会文化研究科 p9 シャドリナ・エレーナ

大学院自然科学研究科 p10 藤 巻 亮

大学院医歯学総合研究科 p10 吉 原 弘 祐

卒業にあたって―感謝と決意―

人文学部 情報文化課程 >>> 酒 井 淳

大学生活では、講義を通して多くの人と知り合うことができました。

特に、1、2年次には教養科目で他学部・他課程の方とたくさん話す機会がありました。一見異なる性質をもつ学問が、実は相互に深く係わり合っていることを認識することができました。総合大学の特色を生かした知の共有やネットワークは、その後の専門科目の学習や就職活動でも大変役立ちました。

私が大学生活で得たものは知識だけではなく、「知恵」です。どのように情報を集め、物事を客観的に判断していくかという方法を多く学ぶことができました。本学には世界に誇れる専門知識、特色を持った人材や環境が揃っております。異なる専門領域の方と関わっていくなかで、私達を取り巻くあらゆる問題に対して、様々な角度から取り組んでいくことが必要だと強く感じました。

本学の今後の発展に期待するとともに、私自身も大学で学んだ「知恵」を社会で活かしていきたいと考えております。

● SAKAI, Aki



2005新潟大学「異文化コミュニケーション」合宿。
本人は前列左から4番目。



春日山城にてゼミの仲間や教授と。
本人は後列右端および右上。

最高の贈り物

教育人間科学部学校教育課程 >>> 佐 久 間 史 信

卒業を目前に控えて、高校の卒業文集に載っていた、ある先生の文章の一文を思い出した。

「これから君たちが過ごす大学四年間という時間は、親が与えてくれる最高の贈り物だ。」

思い返してみると、私の大学生活はいたって地味なものであった。そんな中で、日々の生活に彩を添えてくれたのは様々な人との関わりであった。大学で学ぶことの楽しさ、大変さを分かち合ったゼミや学科の仲間。学外での活動をともしたまなび屋の仲間。教師を目指す私を温かく迎え入れてくれた小中学校の子どもたちと先生方。歴史学という学問の奥深さを教示し、出来の悪い私を励まして下さった指導教授。私にとって、四年間という時間に包まれた「最高の贈り物」の中身は、大学生活を通じて得た、こうした人たちとの出会いであった。お世話になった方々に深く感謝したい。そして、そのような贈り物を私に与え、学生生活そのものを支えてくれた家族に、この場を借りて謝意を表したい。

● SAKUMA, Fuminobu

卒業・修了する 学生からのメッセージ

e s s a g e

新潟大学を卒業・修了するに当たっての思い

法学部法学科 >>> 山本 淳

「もっと色々な人と出会いたい」というのが、編入生(3年次編入)である私の卒業にあたっての率直な思いです。

高校生や専門学生時代と同様に、学校の中では色々な学生や先生方との出会いがありました。もちろん、その出会いも私にとって重要なものですが、今の私にとって、より重要なのは、学外での出会いでした。毎年、夏には交流ディスカッションを行うことで複数の他大学の学生と出会い、3年の後期には就職活動により全国で多くの就活生と出会い、10月にはワークショップの運営に携わることで色々な業界の社会人と出会えました。

学外での出会いのチャンスが充実しているため、大学では色々な刺激が生まれ、そしてその連続が、社会人に向けての経験値となっていくのではないのでしょうか。これが、大学での『出会い』の特徴だと、私は考えます。できることならば、大学でしか味わえないこれらの出会いを、まだまだ味わい続けたいものです。

YAMAMOTO,Jun

卒業にあたって

経済学部経済学科 >>> 柳 沼 大 介

入学式でのどきどきが昨日のここのように感じられる…まさに光陰矢のごとしです。私の新潟大学での4年間は毎日が充実していて楽しくて、本当にあっという間でした。できることならば、もう少しこのまま大学生を続けていたいのですが、社会が私を呼んでいるので諦めましょう。

どうしてこんなに充実した毎日を送れたのか、それは自分の好きなことを思う存分やれたからです。ときには家でだらだらと一日過ごしたり、ときにはぱらりと旅に出たり、ときには毎日のように飲み歩いたり…ああ学生って素晴らしい。そんな充実した毎日の中にはもちろん大学で真剣に勉強したこと、アルバイトでへまをしたこと、一生の仲間と出会えたこと、書ききれないほどの経験がありました。この新潟大学での4年間のおかげで今の私があり、これからはあるのだと思っています。

YAGINUMA,Daisuke



横国大・東工大との交流ディスカッションにて。



研究室の担当教官、および研究室の仲間と一緒に。
本人は右から2番目。

大学生活を振り返って

理学部物理学科 >>> 長 島 正 幸

新潟大学で過ごした四年間は素晴らしいものだったと思います。四年間で、多くの事を学ぶことができました。

新潟大学は勉強するための環境が充実しています。特に図書館は夜遅くまで開いていたので、試験期間中はよく図書館で勉強をしました。四年生になって配属された研究室は実験設備も整っており、何不自由なく研究する事ができました。

周りの人達にも恵まれました。先生方の講義は丁寧で、質問すれば熱心に教えて下さいました。ひとつの問題を友人達と取り組んで解決したことも、とてもいい経験になりました。

今にして思えばあっという間の四年間でしたが、この大学生活で得た経験は、きっと自分を成長させてくれたと思います。新潟大学で学ぶことができ、本当によかったです。

NAGASHIMA,Masayuki

卒業にあたって

医学部医学科 >>> 三 浦 健

大きな期待と不安がないまぜになった入学式も、今は懐かしく思い出される。

海・山・川、豊かな自然と食に恵まれ、四季折々の景色が広がる新潟。ここでの6年間は友人、先輩、後輩との出会いに満ち、夢中になれるものがあった。先生方、そして何より患者さんから多くのことを教わった。雪深く厳しい冬に言葉を交わさなくともそっと道を譲り合う、そんな人々の優しさ、温かさに触れた。この地で医師となり、医療に携わりたいという想いはいっそう強くなった。

経済状況、少子高齢化、国際化等、今私達を取巻く環境は劇的に変化しており、卒業後も困難に直面することがあるだろう。しかし、仲間と共に情熱をもって向き合えば、必ず乗り越えられると信じ、目の前の患者さんに全力を尽くせる医師になりたい。そして、新潟大学で得た広く深い視野と知識を生かして社会に貢献し、放鳥された朱鷺のように、大きな世界、未来に向けて飛躍出来るよう、努めていきたい。

MIURA,Takeshi

卒業・修了する
学生からのメッセージ

eSSaGe

大学生活を振り返って

医学部保健学科 >>> 島田 真至

アツと言う間の大学生活だった。4年という歳月は一生のほんの1部分ではない。しかし、大学での4年間は一生の内の大きなウェイトを占める濃密な時間となった。様々な人や物事に会い影響を受け、成長することができた。4年間所属した探検部もその中の一つだ。探検部でラフティング(激流川下り)に出会い、僕は川の虜となった。「より激しく、より楽しい川を下りたい」その思いはいつしか「自分の技術はどこまで通用するのだろう」に変わり、大会で優勝するまでになっていた。チームメンバーには生まれてきてくれたことを感謝し涙を流した。部員は寝食を共にし、同じ感動と苦楽を共有してきた家族のような存在になっていた。ここまで打ち込めるものと出会えたこと、そして、存在自体に感謝できるほど深く人と関われたことは、自分の人生において掛け替えのない財産となった。この財産を胸に、看護に打ち込み、深く患者さんに関わっていけたらと思う。

SHIMADA,Masashi ●



第31回日本リバーベンチャー選手権大会にて。
本人はラフト(船)上の右端。

6年間を振り返って

歯学部歯学科 >>> 石坂 淳子

月日が経つのは早いもので、大学生活も残り僅かとなってしまいました。親元を離れ、新潟での一人暮らしに初めは寂しさで一杯でしたが、今はこの生活が終わってしまうのが名残惜しいです。そんな風に思えるのも、この6年間、毎日が本当に楽しかったからだと思います。楽しい事も辛い事も、クラスの皆がいたから頑張てこられました。

皆が歯科医師になるという共通の目標を持ちながら、抱く夢は十人十色という環境の中で、私自身も自分の将来に真剣に悩み、理想の歯科医師像を見つける事が出来ました。特に、患者様と接する機会を与えて頂けたことは、何事にも換えがたい貴重な経験です。

素敵な仲間に出会い、尊敬出来る先生方に囲まれ、家族を含め多くの方々に支えられて過ごしてこられた6年間…振り返ってみると溢れてくるのは感謝の言葉ばかりです。本当にありがとうございました。大学での思い出を心の糧に、夢に向かって邁進していきたいと思います。

ISHIZAKA,Junko ●



技工室にて歯学部の仲間と一緒に。
本人は左から2番目(椅子に座っています)。



学科の仲間と一緒に。筆者は後ろから2列目の左から8番目。

卒業を迎えて

工学部建設学科 >>> 中澤 晶子

大学での学生生活が終わろうとしている。長かったような、それでいて短かったような4年間を振り返ると、達成感と後悔とが入り混る複雑な気分になる。

私の大学生活は二つのことで占められていた。一つは邦楽部に入り、尺八という楽器を演奏する喜びを知ったことである。部活動での思い出は辛く苦しいものも多かったが、どの経験も自分の糧となったと思う。もう一つは建築学コースで学んだことである。同学年の仲間の課題に真剣に取り組む姿はとても良い刺激となった。課題で苦しんだことさえも、今となっては楽しい思い出である。

卒業を前にして、「私が大学を卒業できるのは決して私自身の力ではない」と強く思う。進学させてくれた家族はもちろんのこと、友人、先輩、後輩、先生方、色々な人の力を借りてここまでたどり着くことができ、感謝の気持ちでいっぱいである。大学での4年間の思い出と経験を大切にして、これからの日々を過ごしていきたいと思う。

● NAKAZAWA,Akiko

卒業するにあたっての思い

農学部農業生産科学科 >>> 二木 明日香

この4年間は今までで一番考え、感じ、成長した4年間でした。特にソフトテニス部で過ごした時間には特別なものがあります。団体優勝という目標に向かって自分にできることを必死にやった三年の秋の北信越大会。能動的に動くことの充実さを知り、団体優勝を果たした時には知らないうちに涙がでていました。一方で、仲間を支えられなかった時の喪失感やがんばりきれない自分の弱さも知り、今の自分の中で課題として活きています。一緒に戦った仲間からは、認める大切さや、一言の重さ、相手を思いやることの温かさを教わりました。親切は本当に伝染しやすい。つらいことも多かったはずなのに、楽しく尊いことばかり思い出すのはみんなのおかげです。

学費200万円分の知識が身に付いたかはわかりませんが、それ以上の価値ある経験と思い出と出会いを得て、私はこの大学を卒業します。大学で学んだことを活かし、春からは精いっぱい社会に貢献していきます。

● FUTATSUGI,Asuka

卒業・修了する
学生からのメッセージ

eSSaGe

生涯の貴重な宝

大学院保健学研究科 >>> 澤田 杏子

私は国際看護学を学ぶため、県外の大学卒業後、新潟大学大学院保健学研究科へ入学した。看護職としての臨床経験のない私にとって大学院生活は不安と期待の想いであった。

大学院生活における社会人入学学生との出会いは、学生生活経験しかない私にとって非常に刺激的で新鮮なものであった。授業は理論的な思考能力やプレゼンテーション技術を習得する為の講義が多く、私は特に国際看護学における保健師の意識変容について研究してきた。

在学中に参加したミャンマー国際看護学研修では、開発途上国における異文化看護に触れ、看護の国際的視点を再確認することができた。

4月からは県内の市役所で保健師として働く予定であり、大学院で学んだ専門性や研究能力を活かし、地域住民への看護ケアを実施していきたい。2年間の大学生活は指導教員や多くの同級生にも恵まれ、有意義な学生生活を過ごすことができ、私にとって「生涯の貴重な宝」である。

SAWADA, Kyoko



ミャンマーの小学生、院生仲間と共に。本人は後列左。

4年が飛ぶように過ぎた...

大学院現代社会文化研究科 >>> シャドリナ・エレナ

私は幸いなことに新潟大学で4年間勉強することができました。最初、経済学部の研究生になり、日本語や日本文化に魅力を感じながら、楽しく勉強しました。

2006年4月から大学院現代社会文化研究科(博士後期課程)の大学院生として、「エネルギー協力を通じた東北アジアにおける地域主義」について研究してきました。勉強の環境が良く、色々な意味での支援もきちんとしていたおかげでこのテーマの研究を深め、さまざまな会議や学会に参加し、研究発表もすることができました。その機会に、世界的に有名な研究者に会い、意見交換をし、自分の研究をさらに深く理解することもできました。

国費留学生になれたので、このような素晴らしい経験を積むことができたと思います。文部科学省に厚く感謝申し上げます。指導教員の小山教授を始め、現代社会文化研究科や学務系のスタッフの方々にはたいへんお世話になりました。新潟大学での経験は一生忘れることができないでしょう。これからも日本とロシアの関係の発展を推進するために一生懸命努力したいと思います。

SHADRINA, Elena N



ヤングリーダーズ国際セミナー、富山市、2007年11月(中央が筆者)。



研究室の仲間と。本人左から2番目。

卒業するにあたっての思い

大学院自然科学研究科 >>> 藤巻 亮

平成21年の4月について新潟大学を修了する運びとなった。‘ついに’と言うのは学部、修士、博士と合わせて9年も在籍していたからだ。今までの人生の3分の1である。そう考えると本当に長く感じる。希望を抱いていた若者も、もう27歳、世間的には立派なおっさんになった。

大学生活で一番何に打ち込んだかというやはり研究なのかなと思う。研究では思うような結果が出せず、つらいこともあった。それでも、先生や研究室のメンバー、友人らに助けられ乗り越えることができ、また、充実した大学生活をおくる事ができた。私を支えてくれた大勢の方には感謝しても仕切れないくらいである。

さて、4月からは社会人になる。この世界規模の大不況もあって新しい旅立ちに不安も少なからずあるが、新潟大学の名に恥じぬように学んだこと、経験したことを生かして社会の荒波を乗り越えていきたいと思う。

FUJIMAKI, Ryo



AACR 2008 annual meetingにて。

新潟大学大学院を修了するにあたり

大学院医歯学総合研究科 >>> 吉原 弘祐

2005年に新潟大学大学院医歯学総合研究科博士課程に入学し、2006年から研究に従事した。振り返ると、この3年間は研究中心の生活で、研究に没頭していたため、あっという間に時間が過ぎてしまった。「石の上にも三年」ということわざがあるが、なんとか3年間の研究成果をまとめ、大学院博士課程を修了することができ、ほっとしている。

3年間の中で最も心に残ることは、AACRのAnnual Meetingに続けて発表できたことである。新しいことに挑戦でき、またいろいろな分野の、いろいろな国の研究者とコミュニケーションをとる機会を得たことは、非常に良い経験となった。今後も大学院博士課程で学んだことを生かし、translational researchに携わっていけたらと考えている。

最後に、ご指導頂きました田中教授にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

YOSHIHARA, Kousuke

卒業・修了する
学生からのメッセージ

eSSaGe

特
集

旅立ちへの想い

～研究と教育の日々を振り返って～

退任する教員からのメッセージ

人文社会・教育科学系(教育学部)教授 p12 橋本 修

人文社会・教育科学系(経済学部)教授 p12 小山洋司

自然科学系(理学部)教授 p13 大矢 進

自然科学系(理学部)教授 p13 関川浩永

自然科学系(理学部)教授 p14 檀上篤徳

医歯学系(医学部)教授 p14 尾崎フサ子

自然科学系(工学部)教授 p15 合田正毅

自然科学系(工学部)教授 p15 長谷川富市

自然科学系(農学部)教授 p16 新美芳二

自然科学系(農学部)教授 p17 竹内公男

人文社会・教育科学系(大学院現代社会文化研究科)教授 p17 木下勝一

人文社会・教育科学系(大学院現代社会文化研究科)教授 p18 鈴木佳秀

自然科学系(大学院自然科学研究科)教授 p18 大橋 修

自然科学系(大学院自然科学研究科)教授 p19 田村 詔生

医歯学系(大学院医歯学総合研究科)教授 p19 山本正治



新潟大学を 退任するにあたっての思い

人文社会・教育科学系(教育学部)教授

橋本 修 HASHIMOTO, Osamu

1973年(昭和48年)、新潟大学に着任して以来、退職まで36年間お世話になったことになる。

教養部に21年間、教育学部に15年間勤務し、人生の大半を新潟大学で過ごしたことになると思うと感慨無量なものがある。この間、1998年(平成10年)には、教育学部が改組され、新課程の健康スポーツ科学課程を担当することになり、今年で8回生の卒業生を送り出すことになった。教養教育、専門教育・研究に多忙感を増しながらも得がたい経験をさせて頂いた。このように長くもいれば、新潟大学の大きな変革のいくつかの節目に遭遇し、その都度苦悶しながらも無事に終えることを深謝したい。

また、課外活動では、ラグビー部の部長及び監督として36年



第59回全国地区対抗大学ラグビー大会出場(平成21年1月6日)。

間学生とお付き合いさせて頂いたことは望外の喜びでもあった。この間、練習環境整備や指導方法などに腐心しながら毎年学生達と切磋琢磨したこともあって、全国地区対抗大学ラグビー大会へは13回の関東地区代表となり、3回の準優勝という結果を残せた。歴代の学生達と現在まで至る親交は、私にとっては換えがたい財産となっている。今後とも新潟大学の益々のご発展を祈念申し上げます。



新潟大学を退任するに あたっての思い(最後の憎まれ口)

人文社会・教育科学系(経済学部)教授

小山洋司 KOYAMA, YOJI

1982年4月から27年間、新潟大学で楽しく働くことができました。この機会に皆さんに感謝申し上げます。退任するにあたって、最後に憎まれ口をさくのをお許し願いたい。

自然科学の世界では、学術論文を(主に)英語で書くのは当たり前のことになっているようだ。新潟大学全体を見渡すと、外国へ調査や国際会議のために出かけるのは理科系の教員が圧倒的に多い。文科系の教員の海外渡航は少ないし、英語での論文執筆も少ない。これは何も新潟大学に限らず、全国的な特徴であるように思う。

私が研究対象としている東欧には小国が多い。たとえば、旧ユーゴを構成したスロヴェニアは人口200万人で、新潟県より小

さいにもかかわらず、現在はEU加盟国であり、2008年の前半はEU議長国の役割も見事に果たした。この国では、文科系の学者は年間に執筆する論文の半分以上は英語で執筆する。彼らは国内の学会よりも最初から国際会議で発表することをめざす。これは学者に限らず、ビジネスでも同様であり、世界市場、とりあえずはEU市場を相手にしなければ、企業は生き残ることができない。だから、いきおい自身の活動を国際化することになる。

それに対して、日本は中途半端に大きな国内市場を持ってい

る。文科系の学問ではどの分野でも相当な数の同業者がいるので、国内の学会や読者を相手にしていればすむので、英語で書かなければという強い動機が働かないが、はたしてこのままでよいのだろうか。



アルバータ大学サマーセミナーに参加する学生を引率したときのニコマ。カナダ、ルイーズ湖にて1994年8月(2列目中央が本人)。



大学を振り返る

自然科学系(理学部)教授

大矢 進 OHYA, Susumu

新潟大学には34年間、大変お世話になりました。大学は海あり、山ありの自然の中で、学究的精神を育むところでは大変よいところであります。悩んだときには海を歩き、魚釣りに興じ、また移り行く佐渡、弥彦、角田山の情景をみて、また新たな感動を受けました。“本当に困ったときは深呼吸を3回しなさい、そしてこれがあとの人生で一番面白いことになるのだ”とよく学生に言いました。

私の専門は原子核の実験的研究でありまして、極低温(～8mK)で原子核のスピンを整列させ、核磁気共鳴で原子核の電磁モーメントの測定と、核を用いた物性の基礎研究を行ってきました。特に極低温で原子核のスピンを整列させる方法は日

長年の共同研究者のStone教授ご夫妻と大坪准教授、極低温核整列装置の前で。



本ではほとんど初めてであり、その成功は後の研究を大きく発展させました。研究でオックスフォードのクラレンドン研究所に1年半ほど滞在して研究を行ってきました。そこで多くの外国の研究者と交流、共同研究を行い、その後の研究に弾みをつけました。いまの大学には昔のおおらかな、よく学び、よく遊ぶ面が消えてしまったように思える。直線的な効率を重んじ、管理された教育、研究が主流になったようだ。朝永先生の言葉ではないが「本当に研究したいのは別なことだが、このテーマだとお金をくれるのでこの研究をしている」様な発想が当然のようになってきた。本当に勉強したい人が学費のことなど考えなく大学に入り、本当に研究したいことをやっていけることを願っております。



退官にあたって

自然科学系(理学部)教授

関川浩永 SEKIGAWA, Kouei

昭和44年4月、本学理学部数学科助手として採用されました。当時は全国的に大学紛争の嵐が吹き荒れておりました。本学は移転問題で紛争中で、私は着任早々この紛争に巻き込まれてしまいました。大変な時期ではありましたが、当時の学生はとてもエネルギーに満ちていたように思います。私の研究分野は微分幾何学(リーマン幾何学)で、研究活動を通して国内外の多くの人達との出会いがありました。一年先輩には故高木斉東北大学教授、一年後輩には渡辺義之富山大教授。高木さんは先輩であると同時に研究上でのよきライバルでもありました。学外では、当時東北大学助教授でありました故丹野修吉東工大教授にリーマン幾何学の基礎について懇切丁寧な教えていた

だきました。海外ではカトリック大学(ベルギー)のバンヘッケ教授との共同研究、ブルガリア科学アカデミーのデミエフ教授との国際研究集会の共催活動(平成4年より1年おきにブルガリアで開催、昨年で9回目)が特に印象に残っています。また教育面では、私の講義は非常に不評だったにもかかわらず、私のセミナーは多くのすばらしい学生さんに恵まれました。卒業後は社会の様々な分野で活躍いたしております。

私のようなわがままで未熟なものがこれまで大過なく過させていただきましたのもすべて数学教室はじめ理学部の皆様方の温かいご理解とご支援の賜物と深く感謝いたします。40年もの長き間、本当にありがとうございました。



白墨を置くにあたって

自然科学系(理学部)教授

檀上篤徳 DANJO, Atsunori

1972年2月新潟大学理学部にまいりました。物理学科の超高層原子分子グループです。博士課程を修了しても、学位は取っておらず、定職もないありさまでしたので、1971年4月から、インドとの共同研究に参加して宇宙ガンマ線を観測していました。

原子分子グループでの仕事は、大学院時代のそれとはまったく異っており、別世界にきた思いでした。やっとデータが取れるようになるまで、数年が経ちましたが、装置作りに悪戦苦闘したのは、今では良い思い出です。

1994年教養部改組に伴い自然環境科学科が誕生しましたが、改組計画が議論されている1993年には、英国にいました。帰ってきて、新学科の教員名簿の中に私の名前を見つけたとき



情報・理工棟の中庭にて。

は、少し戸惑いましたが、学科を替わることへの抵抗はありませんでした。

多くの学部学生や大学院生と一緒に勉強してきました。新潟大学でも、また学外の共同研究においても非常に楽しい37年でした。ご支援くださいました多くの方々に感謝申し上げます。最後に新潟大学の益々の発展をお祈りいたします。



カナダ・スタディツアーの思い出

医歯学系(医学部)教授

尾崎フサ子 OZAKI, Fusako

新潟大学には平成5年に赴任しました。

15年間でいろいろ思い出があります。その一つがカナダ・スタディツアーです。保健学科では“外国の文化、医療、学生生活にふれ国際的視野を広げ専門職としてのあり方を学ぶ”を海外研修の目的の1つに掲げています。今まで、古くは1980年韓国のチョンジュ、その後はラトロープ大学(オーストラリア)(2003)、ビエンチャンにおける医療事情(ラオス)(2005)、モホーク・カレッジ・マクマスター大学訪問(別名カナダ・スタディツアー)(2007、2008)と続いています。

今年の卒業研究を担当したA学生は2年次に参加したときの講義「Bridging Program」(橋渡しとなるプログラム)を覚え

ていて、日本におけるインドネシア人看護師の受け入れプログラムとオンタリオ州(カナダ)のプログラムを比較検討しました。課題には以下がありました:ケアを受ける患者、ケアを提供する外国人看護師、受け入れ職員のインタビューおよびアンケートを使用して、より適切な日本におけるプログラムを目指す。

私は、A学生が講義内容をしっかりキャッチしていて、現在起きている日本の医療事情と結びつけたことに感激したのでした。そして、学生にはさまざまなチャンスを提供することの重要性を感じました。

新潟大学のますますのご発展を祈念いたします。



講師と一緒に、モホークカレッジにて。2007年3月。



無我夢中の36年

自然科学系(工学部)教授

合田正毅 GODA, Masaki

30年間北海道しか知らなかった若輩が、長岡市の旧新潟大学工学部に新米教員として着任したのは昭和48年(1973年)の4月でした。共通講座に所属し、全学生を対象に物理の教育を担当しました。7年後工学部は現在の五十嵐キャンパスに統合移転し、その後大学院自然科学研究科が創設され、ようやく本格的に学生を指導出来ることになりました。共通講座は、教養部改組に伴い新設機能材料工学科の一部に改組され、現在に至ります。

その間、長岡の雪の深さと人情の温かさ、新潟移転、移転後の共通講座への風の冷たさ、自然科学研究科での新鮮な人間関係、学科の設立と運営の大変さ、マゲダブルグ大学との



マゲダブルグ大学との第1回夏の学校(1996年新潟)。今年は第13回がドイツで開催される。

国際交流への道の開拓、いわゆる物性拠点計画の策定への関与、“授業評価”とは異なる“授業実態・効果アンケート調査”の立案と解析、日本学術会議や日本物理学会の物理教育委員会などで理科教育問題の解決に向け知恵を絞ったこと、最後になったが研究室やテニス部での学生諸君との熱いやりとり、などが思い出されます。私の授業と指導は学生諸君にどの程度の影響を与え得たのであろうか。

今は法人化の波をかぶり、大学の生き様も変わり大変ですが、新潟大学が皮相に惑わされずに大きく発展してゆかれることを念じております。



新潟大学を 退任するにあたって

自然科学系(工学部)教授

長谷川富市 HASEGAWA, Tomiichi

私は本学工学部機械工学科を1966年に卒業しその後大学院・助手の7年間で東京工大で過ごし1973年4月に新潟大学に着任いたしました。東工大時代に続き本学でも非ニュートン流体の研究を行うことにしました。この分野は、自作装置で実験が出来ることが魅力で研究環境のよくない所でも十分研究が出来たと思ったからです。先ず希薄高分子溶液の流動に伴う弾性を精確に測定すべく実験室の高さ7mの天井梁を利用する大きな装置を作りました。これによれば、希薄高分子溶液のみならず溶媒である水にも小さいながら弾性らしきものが測定されました。これは面白いと言うことでその実験を続けることにしましたが、これが結局ライフワークになりました。言い換えれば一生



研究室にトロント大学のジェームス教授を招いた際に撮ったもの。

やらねばならないほど難しいテーマに取り組むことになったのです。これでは業績が上がらないため、高分子溶液、洗濯洗浄、動的表面張力、複雑流体、工業上の問題、等を流体工学的視点で研究いたしました。今でも水の高伸張流には弾性が生じると主張していますが、十人に一人位しか認めてもらえません。それでも本学で教鞭をとり学生諸子と共に研究できたことを幸せに思っています。新潟大学の皆様に感謝申し上げますと共にご多幸を祈ります。



去りゆく(老)教師から 若者へのメッセージ

自然科学系(農学部)教授

新美芳二 NIIMI, Yoshiji

「新潟大学での38年間の教員生活は如何でしたか?」、「本当に楽しかった。」「どうしてですか?」「それは20歳前後の若者にいつも囲まれ、生活ができたからです」と答えます。そしていつも新しい「出会い」があるからです。「出会い」といえば、私が助手として着任した頃、福島・会津出身の学生が「先生、きれいなユリが会津にあります。一緒に見に行きましょう。」と誘ってくれました。その学生との「出会い」、ヒメサユリとの「出会い」がこの大学での私の研究生活の方向を決めることになりました。大学教員は、若者、それも未来に胸を膨らます若者といつも語ることができ、日常生活を共に過ごすことが出来るから楽しい。楽しい大学生活を過ごすために、若者は耳からイヤフォンをはずし、友達や先生と積極的に話をしましょう。

大学教員は教育、研究、管理運営に関わります。それに最近では社会貢献という課題もあります。とはいえ、大学はなんといっても教育機関であり、学生はお客様です。お客様に満足していただくことが出来なければ、その大学は衰退し、やがては消滅します。「この大学に来てよかった」と満足してもらうために、教員や職員は協力して、努力しています。さまざまな理由から出来ることと出来ないことがあります、改善してほしいことや希望を大学に遠慮なく要求すべきです。黙っているのは相手に伝わりません。要求するからには責任も生じます。自分たちもいつまでも「お客様」とし



09年1月に、マレーシアで行われた、第1回農学系学部学生国際シンポジウムに参加したUniversiti Putra Malaysiaの学生達に囲まれて。

てではなく、教員や職員と一緒に楽しく学べる大学づくりに参加しましょう。学生、教員と職員の三者がうまく機能してこそ魅力ある大学となります。今年1月、農学部学生3名に同行して、マレーシアで開催された第1回農学系学部学生国際シンポジウムに参加しました。学部学生によってすべて準備されたこのシンポジウムは「素晴らしい」の一言です。会議の中での積極的な発言にたくましさを感じ、文化や考え方の違い、さらには母国語でないにもかかわらず彼らの英語能力の素晴らしさを再認識する機会となりました。これからの若者は国際舞台で活躍する、しなければならない機会が多くあるでしょう。そのためには、専門分野ばかりでなく幅広い勉強が必要であり、英語能力向上に努めることが大切であると思います。新潟大学が教育・研究の場として益々発展することを祈っています。



感謝し、期待して、お別れを

自然科学系(農学部)教授

竹内 公男 TAKEUCHI, Kimio

昭和55年7月に農学部に着任して以来、自然科学研究科設立、学部改組、国立大学法人化という大きな変化を体験しました。大学を巡る急激な変化に付いていくのが精一杯であった教員生活をここまで続けられたのは、教職員皆様のお力添えと研究室卒業生諸君のご協力の賜物と感謝するばかりです。

私の研究対象である森林は半ば自然任せで悠長な存在であることが本質ですが、今の日本の森林は戦争末期以降の約30年間の激動の時代にその姿を人工的に変えられた結果といえます。現在の森林の姿については批判的見解が優勢ですが、時の勢いに流されずに遠い将来の森林の姿を見通すのはなかなか難しいことです。それでもなお、今の森林を適切に管

理しながら、将来の望ましい姿に変えていくことが林学者の課題であり、今後もその努力を続けていきたいと思います。

私が助手になった頃の大学は本来の森林のように悠長な存在でしたが、今は激動期の森林のように1年先の姿さえ不透明な変化の渦中にあります。大学の教育と研究には社会の将来を見通す視野が必要です。混沌とした状況の先に何があるかを予測することは難しいことと思いますが、皆様方が叡智を集めて難局を乗り切れ、新潟大学がさらに輝く日の来ることを期待します。長い間、本当にお世話になりました。



新潟大学を 退任するにあたっての思い

人文社会 教育科学系(大学院現代社会文化研究科)教授

木下 勝一 KINOSHITA, Katsuiichi

新潟大学に40年間お世話になりました。この間を振り返りますと、大きな節目ごとに大学改革という言葉が思い浮かびます。最初に赴任した40年前は、全国で大学紛争が吹き荒れておりましたが、新潟大学を再建するという改革運動がありました。また、その後もさまざまな大学改革が展開され、わたくし自身が直接かかわった改革としては、教養部・商業短期大学部の廃止転換がつよく印象に残っております。わたくしの所属しておりました経済学部も、この教養部・商業短期大学部の廃止転換にともなって規模の拡大がはかれ、教育研究環境が以前にくらべて飛躍的に充実した学部に発展することができました。

しかし、今思いますと、数多く経験してきました大学改革が時



ゼミ合宿研修でのキャンプファイヤーの一コマ。

代の流れに沿ったものではありませんでしたが、かならずしも、事後の充分な点検・総括を経たうえでの改革であったかどうかということに疑問は残っております。とくに、国立大学の独法化という大学改革がこれまで経験したことのない「集中と選択」の未知の領域に入っているいま、この思いをつよくしております。

新潟大学が国立大学法人として第2期の時代に入る年に退職いたしますが、未曾有の危機の時代を乗り越えて、いつその発展を遂げていきますよう祈念申し上げます。



卒業・退任

人文社会 教育科学系(大学院現代社会文化研究科)教授

鈴木 佳秀 SUZUKI, Yoshihide

実質的に研究生生活が始まったのは、昭和57年4月からであった。新潟大学教養部に歴史学の講師として就任し、古代オリエント史を講じることとなった。アメリカでPh.D.(旧約聖書学)を受け取った。カリフォルニア州で就職の手続きに入っていた時に、航空便で、新潟大学で教員を求めているが赴任する気持ちはあるか、との文字が目飛び込んできた。時間を考えず、その場で国際電話を入れ「帰ります」と叫んだのを思い出す。当時の教養部は自由な雰囲気が保たれていた。専門をそのまま教えるのではなく、学生たちの目線にあわせ平明な語り口で歴史の講義をするなら何を素材にして教えてもいい、専門を語ってもいいと言われた。宗教、神話、政治史、法制史に関する講義



荒川学長に随行し、ブリストル大学との交流協定に調印したときのスナップ(左から2人目が本人)。

ノートに10数種類も用意したが、それらがその後の研究動向を決める契機となった。教養部は平成6年に解体されたが、この時までに蓄積したことがその後の論文や著作に繋がった。人文学部に移ってからは卒論指導が加わった。教養部時代から続けていた自主ゼミを、卒論準備ゼミと呼び変えて学生たちとの学びの場を維持したが、それも楽しい思い出となった。新潟大学で得た経験を、第二の職場で活かしたい。



新潟大学を 退任するにあたっての思い

自然科学系(大学院自然科学研究科)教授

大橋 修 OHASHI, Osamu

科学技術庁金属材料技術研究所で30年間、そして新潟大学で13年間。43年間にわたり、材料の加工、一貫して「接合」に関わる研究に携わることが出来たことは、非常に幸せであったと思う。

新潟大学赴任当初は、研究資金や実験室等で非常に悩んだが、研究予算にも恵まれ、また総合研究棟の新築もあって、大学で多くの研究成果をあげることが出来た。

これらの成果は、13年間に、学部生34人、博士前期課程28人、博士後期課程11人の学生の成果の賜でもある。振り返ってみると、助手と一緒に(7年間)に仕事が出来た時が、研究室のアクティビティが最も高かったように思う。



卒業生とともに。

何も知らない学生に対して、「如何に研究の動機付けをして、そして研究に興味を抱かせるか」が重要であり、一番腐心したことでもある。

昨年末に大学発のベンチャー企業(株)WELLBONDを設立した。接合について、「基礎的な研究」から「ものづくりを目指した研究」を通して、多くの知見を得た。今までに、培った接合に関わるノウハウを生かし、良い(WELL)接合(BOND)を目指す各種情報の提供とコンサルティングを通して、これから社会に貢献できればと考えている。



新潟大学を去るにあたって

自然科学系(大学院自然科学研究科)教授

田村 詔生 TAMURA, Norio

平成8年に本学に赴任して以来、早くも13年経ち、美しい並木、春の桜と秋の紅葉に代表される自然豊かな環境と、諸先輩、同僚、若い人たちのおかげで、この度無事定年退職を迎えました。この機会に、お礼を申し上げます。

現在世界及び日本には、深刻な問題が山積していますが、このようなことは歴史的にしばしばあることで、夜の後には朝が来ると信じています。「朝」を迎える為に最も重要な要素は、特に天然資源が少ない日本にとって、また知的活動を主たる役割とする新潟大学にとっては、高い志を持つ「人」であると思います。しかし、高い志の実現には、易きに流れない心がけと努力が必要であります。特に若い人たちに、一言申し上げたいと思

います。総合大学である新潟大学で、広い範囲の多くの人々との交流の中で、多いに、見て、聞いて、読んで、会話して高い志を得、経験して、学んで、研究して、その実現を図って下さい。

つい先日アメリカには、オバマ大統領が誕生しました。また嬉しいことに、去年は4人の日本人がノーベル賞を受賞されました。これらの何れの方々にも共通することは、決して、自分の能力や情熱を注ぐ対象を、ある「自分の能力や環境による限界」を設定しその中に押し込めようとされなかったということだと思います。高志の国の新潟大学が志高い人の集団として、世の中に一層重きをなす様に発展することを、大学の外から御祈りしております。



新潟大学を 退任するにあたっての思い

医歯学系(大学院医歯学総合研究科(医))

山本 正治 YAMAMOTO, Masaharu

学生として6年教員として41年、合わせて47年間新潟大学にお世話になりました。半世紀にわたる思いを一言で述べるとすれば「私をここまで育ててくれた新潟大学への感謝」です。昭和39年の新潟地震の中での解剖学骨学実習や、昭和43年のインターン制度廃止の為の卒業試験ボイコット運動等、どんなに大変な時にも教職員の方々は私達を見守ってくれました。教員になってからも、農薬の環境汚染に関する私の研究で社会が騒然とする中、成り行きを見守ってくれました。いつも私の背中をそっと前に押してくれたのが新潟大学でした。

感謝の気持ちとしてアメリカ・ロシア・中国との医学生交流、チリ・ハンガリーとの国際共同研究等、あらゆる機会を捉えて新潟

大学のすばらしさを世界に向けて情報発信をしてきました。そのモットーは逆転の発想としてThink locally, act globally.でした。言い尽くせない私の思いは『どうなる日本の医学・医療ーグローバル化を体感した医学研究者の随想』(新潟日報事業社)としてまとめました。最後に「新潟大学は日本のトップ10、世界のトップ100をめざす」ことがアクションプランに明記されましたが、この目標達成の一方略として、教職員が一丸となり本学のすばらしさを世界に向け情報発信することを期待しています。



「ミネソタナイト in ニイガタ」(ミネソタ大学医学部長デボラ・パウエル(写真中央女性)一行が来日。歓迎会で万代太鼓の皆さんと記念撮影。2005年11月)

第57回 卒業制作展

●2009年2月3日～8日

●新潟県民会館3階アートギャラリーA

～ 57 t h S O T S U T E N ～

大学院教育学研究科教科教育専攻美術教育専修の修了生と、教育人間科学部芸術環境創造課程造形表現コースと学校教育課程美術専修の卒業生による卒業制作展が開催されました。大学での経験を通じた自分の成長の証ともいえる作品の数々。訪れた方々は、その作品が語りかけるメッセージに耳を傾けるように鑑賞されていました。



view

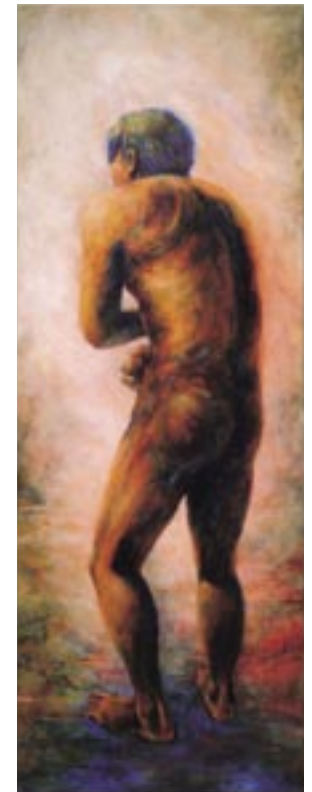
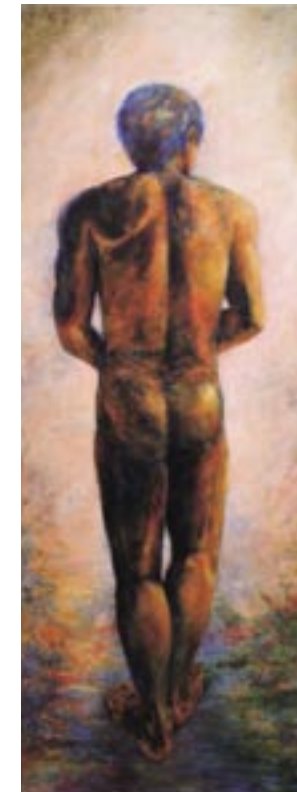
眞 島 圓 [洋画]

■制作意図

異常な人工物の集積とそこにあるもの。その表面上の光り、輝く眺めを描こうと思いました。

■苦勞した点

画面のサイズに慣れるまで時間がかかりました。



憧憬

大 橋 知 世 [洋画]

■制作意図・及び作品のコンセプト・テーマについて

以前から人体の筋や肌の表情による形の力強さや美しさが好きでした。また、感情などを表現するような身体表現を見るうちに、人間の内面へと興味をもちました。そこで卒業制作では、人間の持つ性質を2つに分け、人体という題材を用いてある種の偶像のように表現してみたいと思い、この作品を制作しました。左の人物を理想的、理性的である個性の曖昧さの象徴として、右の人物を本能的、利己的、その醜悪さと愛しさの象徴のように描きました。二面性。それから他者と自分と。2体の人物の存在とその間の曖昧な距離を感じてもらえるような作品になれば、と思いながら制作しました。

■苦勞した点

人体の形を描くにあたって、連なりや奥行きを表現するために筋肉や骨格など構造を調べました。また、コンセプトから一対の作品にしようと思っていたのでそれぞれの人体のポーズと画面への収め方には苦勞しました。



とおくはなれてそばにいて

織 田 侑 那 [デザイン]

■テーマ

ひかりの呼吸

■制作意図

照度をとるための照明よりも、心の印象や物語を人に与えられる自由なあかりをつくりたいと思いました。
光は人の感情が投影されるものだとは私は感じていて、この作品が人のキモチと空間をつなぐ導入口になればいいと思っていました。
さらに、無機質な素材とは対称的に、有機的な形を用いることで生まれる作品自体の生命感と、照明が実現できるその場の居心地を追いかけました。



KA-SA —transportable umbrella—

渋 谷 翔 [デザイン]

■制作意図

日常生活でちょっと面倒に思ってしまう行為を楽しむための道具の提案です。本体に買い物用のボード、専用のポリタンクやゴミ箱をつけることによって「運ぶ」という行為を楽に楽しく行えます。

『Cu-gu』 —Let's make a secret base—

秋 山 智 仁 [彫塑]

■制作意図

前年度より継続した本学部附属幼稚園の環境整備プロジェクトの一環。

■コンセプト

組み替えの要素により遊びや学びを創出し、園児と教師の繋りの場をつくることを目的とした遊具型ツール。

■ポイント

組み替え可能なジャングルジム(Play cube)にごっこ遊びの出来る天板(Play board)を組み合わせることで無限の遊びをつくる。

■苦勞した点

実際に幼稚園において使用するため特に安全性に重点を置いて制作した点。ものづくりの基本的な精神を見直すことが出来た。



submerge

手 塚 千 晴 [彫塑]

■制作意図

題のsubmergeには『潜水する』という意味があります。丸太の樹皮の堅い部分から内部の柔らかい部分へ沈み込んでいく形。そこに自己のふかい部分にあるものへ問いかけるイメージを重ねました。

■苦勞した点

木目や樹皮の質感、五体の関係性をどうしたら生かせるかという点で、設置に苦勞しました。



SOTSUTEN interview 卒業制作展 インタビュー

加納いずみ

■会場を作る上で特に力を入れたこと、気をつけたことはありますか？

「会場全体としてはいらっしゃるお客様のことを考えたつくりにすることです。歩く道順や導線を考える時には、皆で何回も集まって会議したのも大変でした。あと作品同士がちょうどいい間隔になるようにするのも苦勞しました。」

大 桃 ひ と 美

■どのような点に力を入れましたか？

「いかに自分の学んできたことを一つの形に表現するか、ということに特に意識しました。私は作品について考えることに時間を費やして、使いたい素材でどう表現していくか、コンセプトをどういう形でそこまでもっていくかということに頭を悩ませました。とにかく、自分の作品をどう見せたいか、どう形に残すかということを考えるのが苦しかったです」

高 畑 杏 子

■作品を鑑賞する上でのポイントなどはありますか？

「触ったり体験できる作品はぜひ体験してもらいたい。見てもらうだけでも嬉しいんですけど、やっぱり体験して欲しいです。学生がいたら作品について聞いてみて欲しいです」

芽吹く

伊 元 志 保 [彫塑]

■制作意図

非人間的で冷たい印象の鉄で、繊細さとしなやかさを表現しようと制作を始めました。

■コンセプト

私たちの世界を構築する絶対的な存在である鉄。そんな鉄に、柔らかな息吹を吹き込み、自然の生命力や躍動感を表現しました。

■苦勞した点

勢いや緊張感を出すためにすべて点付けで溶接したこと。また違った表情を出すために、作品を形作る葉をひとつずつ叩いて曲げたこと。

学生 座談会

いよいよ卒業を迎える4年生。

4年を振り返ってみると、様々なことがあったと思います。楽しかったこと、辛かったこと、成長できたと感じることなどなど…。その4年間の想いを言葉にして、後輩のみんなに伝えてもらおうと思います。

卒業生



●経済学部 4年
今泉 奉文
IMAIZUMI, Tomoyuki



●経済学部 4年
庄司 大輔
SHOJI, Daisuke



●教育人間科学部 4年
加藤 雄一
KATO, Yuichi



●教育人間科学部 4年
菅野 瑛彦
KANNO, Akihiro

大学生生活の思い出は？

講義の取り方って
ありますか？

就職活動のための
アドバイスを！

学生生活を
点数で表すとしたら

社会に出て
成し遂げたいことは？

自分自身変わったと思うこと、
得られたものは？

学生編集スタッフ●
4年間の大学生生活の思い出は
ばんですか？



庄司●私は管弦楽団に所属してまして、3年生の冬に東京公演を行いました。そこで1年生からずっと積み上げてきて、3年生で結果を残すことができました。苦労もいっぱいありましたが、結果を残して成功できたということがものすごくいい思い出です。



菅野●4年間何をしていたかという、やりたいことのためにお金を稼いで、そのために使って、そしてまたやりたいことを見つけてお金を稼いで…、の繰り返しでした。あくせくやっているうちに4年間経ったなという感じです。



今泉●1年生からずっと4年間、環境活動のサークルをやっていました。その中でも印象に残っているのは、本州から離れて佐渡に、毎年田んぼの再生をするといったイベントをしに行っていたことです。毎年違うメンバーで行くので、人数もばらばらで、毎回新鮮でした。泊まる場所も、田舎のよさ、新潟っぽさを感じられました。

それが一番印象に残った思い出です。



加藤●僕は日本中を旅していました。今は笑顔写真家として活動していて、各県に行き、その土地の笑顔、いろんな人の笑顔を撮らせてもらっています。旅先でその土地に関わりたいたいと思って、ボランティアをしたり、ヒッチハイクをして、そこで出会った笑顔を撮らせてもらったり、そんな写真家として活動をしています。

僕は今、新潟中を笑顔でいっぱいにしちゃう集団、団体を組んでいて、この前は新潟で「笑顔で笑顔になっちゃう笑顔展」という個展を開いたりもしました。すごく充実した大学生活でした。



笑顔の写真展を
開きました

在 学 生



●教育人間科学部2年
丸山 茜
MARUYAMA, Akane

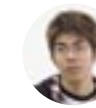


●経済学部1年
安澤 陽平
ANZAWA, Youhei



●法学部1年
菓子谷 弥虹
KASHITANI, Yako

学生編集スタッフ●ありがとうございます。在学生の皆さん、先輩の4年間こうだったよという話を聞いてどうですか。今こういうのを頑張っていて、いい思い出ができたというものはありますか。



安澤●先輩たちは結構外に出て活動していると感じました。自分は群馬出身で、新潟に住んでまだ1年経っていないけど、外に出ていろんな行動をしたい、ボランティアもやってみたいと考えています。



丸山●2年生がもう終わりますけど、やっぱりあっという間でした。外国に留学もしたいと思っていたけど、しないで終わってしまうので、加藤さんみたいにやりたいと思ってすぐ行動に移せるのはすごくうらやましいなと思いました。

学生編集スタッフ●
大学ではの講義の取り方って
ありますか？



今泉●経済学部は最初ミクロ経済やマクロ経済の講義を受けますけど、「これが社会に出て何の役に立つんだ」って言う人ってけっこういました。高校生が「因数分解なんてこんなの社会に出たら使わないよ」と言うのと同じかも。確かに、使う機会はないかもしれません。でも、いつか何かの役に立つかもしれないというふうに考えを変えたら、大学の授業を受けるにあたって張りが出ました。だから「〇〇学部だから」と学部縛られないで、敢えて自分の専門分野じゃないものをかじってみる面白さを味わってほしいですね。



学部縛られずに、敢えて自分の専門分野じゃないものをかじってみる面白さを味わって！



菅野●今泉君も言ってくれたように、僕もいろんな学部の授業を取っています。いろんな学部の授業を取ってみるとすごく楽しいですね。雑学という感じでもないけど、単純に面白そうと思ったら受けてみるのもいいと思います。医学系の授業はすごく面白かったのはいっぱい取りましたね。



庄司●4年間いつも部活とバイトばかりだったので、今も授業がちょっと残っています。大変ですけど、実は今、卒論の講義を取っています。部活とバイトばかりやっていたので学部のゼミの人や教授とも全然仲良くなかった。でも、卒論をやっているうちにゼミの人と団結感が生まれたり、それこそ教授室に1日中缶詰で先生と一緒に卒論をやっていたりすると、先生の意外な側面を見たり、いろいろなつながりもできたり、いい経験になりました。

大学は遊ぶため、あと就活のためと割り切って考えてもいいと思います。だけど、結局何か残さないともったいないとも思っています。遊ぶためだけにいっぱいお金を使うならフリーターをしていればいいし、就活のためだけに4年間使うのもバカバカしい。何か一つの形を残したい、という一つとして卒論もあるのかなという思いがあります。

学生編集スタッフ●卒論は結構ためになるということですね。



庄司●結果論の話ですね。やっている時は、取らなきゃよかったなと(笑)。

学生編集スタッフ●
4年間の大学生活で自分自身変わった
と思うこと、得られたものは何ですか？



加藤●大学生になってすごく変わったと思うのは「可能性」です。高校生の頃は何かをしたいという思いがあっても、自分のスキルや人脈、経験も何もなく、ただ何かしたいと思うだけでわだかまりがありました。だけど、大学に来ていろんなところに行っている人に出会って視野がすごく広がった。そこで思ったのが、「何でもできる」ということ。何でも、社会に対してでも自分がこうしたいと思って、それに向かって行動していけば社会も絶対認めてくれるし、どこかで必ず見てくれる人もいますので、本当に自分がこうしたい、こうなりたいと強く思ったら絶対に不可能はないと思います。自分で壁を作らないで、自分の可能性を信じて、不可能だなんて考えずに挑戦してほしい。それを後輩に伝えていきたいですね。



今泉●高校生の時は高校の中で一番勉強ができればいいと思っていました。勉強ができれば褒められるし、自信も持てたけど、大学に入ったらそうでもない。例えば、ボランティアをしたり、国体に出たりする人の方が生き生きしていました。大学で自分に自信を持つようにするためには、人に言われた目標じゃなくて、自分で決めた目標に自分で向かっていかなきゃいけない。さっき加藤さんが言った可能性ということも含めて、自分の目標を定めて、それに向かっていく。4年間でそれらに気がついたこと、その力を身につけられたことが得られたものだと思います。



庄司●4年間、テレビ局のカメラアシスタントのバイトをしている中で得られた経験が、大学生活で得られたものです。1年生で入った時、ちょうど中越地震1年目の復興というタイミングでいろいろな所に行かせてもらって、いろいろな人に出会いました。その中で、様々な価値観や、悲しみだったり、楽しみだったり、いろいろな気持ちに触れている経験ができたことが得られたものですね。

さらにまた中越沖地震が1年半前にあった時にちょうど現場にいて、自分も被災しました。家が崩れている中、最先端で報道する側の人間としていろいろな人に出会って、そこでも悲しみに触れました。同時に「自分はどうしたいのか？自分はもっと新潟を元気にしたい!」という気持ちが生まれてきたりもしました。そういった人と人との出会いの中で自分の価値観も広がっ



テレビ局のカメラアシスタントのバイトをしている中で地震の現場へ。人々との出会いの中で自分の価値観も広がりました。

ていったので、いろいろな経験を後輩の皆さんにもして欲しいと思います。



菓子谷●加藤さんの話を聞いていてすごく感心することばかりでした。今、全国を回って写真を撮って写真家として活動されていますが、それは大学に入る前からやろうと決めていたことなのか、それとも大学生活を送る中で何か影響されることがあって、自分でやってみようと思ってこんなふうになつたつながりを得られたのか、その辺を聞きたいです。



加藤●中学1年生の時に映画監督になろう、自分の中で表現というものを追求しよう、と思っていました。表現の種類っていっぱいあって、こういうふうの前に立って講演するのも表現だし、ダンスや音楽にもいろんな表現方法があるから、自分の中で自分のいろんな表現を使って自分の思いを人に伝えたいという気持ちも以前からありました。でもやっぱり高校生だから遊びみたいな感じでした。だけど、大学に入ったらいろんな人がいて、自分より上のスキルをもっている人がいる。そういう人に出会って話をしてみたら、仲良くなって、こうやってこうしたほうがいい、って教えてくれたんです。そこで教えてもらったことを自分の中で噛み砕いて、自分の栄養にして、どんどん大きくなっていった結果、こういうふうにな国を回れたのかなと思っています。軸となる思いはあったけど、肉となる部分がなくて、それを大学でいただいたのかな、という感じです。





丸山●就職先を決める時って自分のやりたい職業に就けましたか。そういうことをどうやって調べたり決めたりしたのかが知りたいのと、あとどんな時期からこういう職業に就こうと決め始めたのかが知りたいです。



菅野●1、2年生の頃はとりあえず免許を取って教師になるのも一つの選択肢だな、という考えで教職を取るために頑張っていました。けど、果たして自分が本当にやりたいことって教員なのかな、と。それで、他学部の授業を取って自分の興味を広げていくなかで、経済の講義を取ったら、難しいけど面白いと思ったこともあって、結局就職先は銀行になりました。自分の希望通りで運良く第一志望のところにも入れたので良かったです。

1、2年生の頃は教職を取るために頑張っていたけど他学部の、経済の講義を取ったら面白くて…



何で銀行にしたのか。決め手として一番自分の中で大きかったのは、接客業をやりたい、という気持ちです。接客といっても飲食店やスーパーや小売業とかいろいろあります。僕はアルバイトですと某スーパーの婦人服やカバン、靴を販売していて、接客しているのがすごく楽しかった。人の相談を受けて答えるということにすごく自分が必要とされて、それに答えて相手が喜んでくれるということがすごく嬉しかったので、接客業にしようと思いました。

そして3年の後期から就職活動を始めていろんな業界を見ました。銀行でも窓口で接客したり、融資の相談で答えたり、プランを説明したりする部分があったので、最終的にはやっぱり銀行に決めました。



今泉●私はさっきの加藤さんとは逆で、仕事に誇りをもつとか、仕事に生きがいを求めるといった考えで仕事の選び方はしませんでした。どういう生活をしたいか、例えば土日は休んで、子どもができたなら一緒に公園で遊びたいなとか、あとは自分のライフスタイルから見てどういう職業がいいか、考えて決めました。だからもし今やりたい仕事がないとか、やりたい仕事がよくわからないとしても、例えば将来30歳になったらどんな生活をしたika、っていうふうに将来をイメージして考えておけばいいと思います。



庄司●バイトでその日ごとに新潟県内のいろいろな場所に取材に行くなかで、毎日いろんな人との出会いがありました。その経験の中で「いろんな人と出会いたいな」という気持ちが強くなって、それを仕事にも生かしたいと考えました。結局大学4年間でいろいろ経験してきた結果、自分の好きなことがやりたい職業につながっていくと思います。加藤君の場合は中学校の時からずっとつながっているけど、過去を思い返した時に、自分の好きなことが実はやりたい職業につながっているということに気付くこともあると思います。

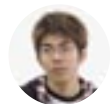


菅野●やっぱり何でその職業に就きたいのか、という動機をしっかりとっておいたほうがいいと思いますね。僕はさっき言ったとおりに接客をやって、人と話したい、と。

学生編集スタッフ●
せっかくなので、就職活動のためのアドバイスも何件あればお願いします。



今泉●面接では、「ああ、この人と一緒に働きたいな」と思わせることができればいいと思います。例えば志望動機に地域貢献ですとか社会貢献ですとか、訳もわからず言っていそうな学生とは一緒に働きたいと絶対思わない。僕にはこんな夢があると言ったとして、変なこと言い始めたぞと思われる、「ああ、一緒に働きたいな」と思わせられれば何でも受かると思います。



安澤●4年間過ごした中で、これをやった、これを誇れる、というもの、若しくはこう思ったからこうしたと、自分を動機づけたものがあったら教えてください。



菅野●人付き合いの中で尊敬できると思える人に出たら、そういう部分を吸収していこうとすごく意識していました。人のいいところをどんどんまねして吸収していけば、自分の力になると思います。そんなことを頭に入れておいてくれたらと思います。

学生編集スタッフ●
学生生活を点数で表すとしたら何点ですか？ 良かったこと、心残りなことはありますか？



庄司●あえて、95点ぐらいです。4年間振り返るとずっと走り続けていたと思います。部活が週2、週3で、その間にバイトが週2、週3ぐらい入っていて、空き日が1日あるけど授業でつぶれたりしていました。ほとんど家にいなかったで、濃い4年間だったと考えると評価しているのかなと思っています。そして、その中のバイトにしても部活にしても何かしらの経験をして、結果を残せた点でも良かったと思いました。あとのマイナス5点というのは、もう少し日にちがあつたらもっといろいろなことをしたかったと思うからです。やり足りなかったこと、心残りなことは、走り続けていて、周りのしている遊びをそんなにしなかったことです。残った時間でこれからするつもりですけど、もっとそういった側面も楽しめたかったと思います。



菅野●自己採点では80にしておきます。やりたいことを全部やったかというそうではないですね。やっぱり時間が足りないというのが大きい。やりたいことはやってきたけど、それでもやり足りなかったという気持ちがあります。



今泉●自分は88点ぐらいかなと思います。自分の大学生活の中では1、2年生の時がピークの時期でした。3年生になって「もうあれもやったし、これもやったな」ということが多くなって、だんだんピークから下がってきている気がして、次にやりたい何か新しいことがなかなか見つからないモヤモヤした時期がありました。4年生になってから外国人と友だちになろうと思って、外国人の友だちをいっぱい増やしました。一緒に音楽のコンサートにも行ったりして、それで80点だったのが88点に上がったかな。あとの12点は外国に行ってもっともっと自分の視野を広げられれば良かったと思っています。



学生編集スタッフ●
最後に、「社会に出て成し遂げたいこと」をお願いします！



加藤●100点満点中で表すと1,000点です！やりたいことも減茶苦茶やったし、毎日幸せだし、言うことはありません。でも心残りなことはあります。3年後とか4年後とかわからないけれども、自分も含めて将来的に自分の店をもちたいと思っている人たちと一緒に、「お店会議」を起こして「これからどうしていくか?」、実際に持っている気持ちからどうアクションを起こしていくか、という会議をしようとしていたところで4年生の今の時期になってしまいました。もっと早くからやっていたらもっと進んでいけたのと思うけど、今までがあって今気づけるのだから、それはそれでいいのかなと思っています。



加藤●社会に出て成し遂げたいことはいっぱいあります。ちょっとした夢ですけど、3年後にお店をもって、5年後に出版をして、10年後に会社を作りたい。不況とかいろいろ肩身の狭い世の中で、どこかに休憩する場所が必要なんじゃないかと。疲れてきても、おいしいごはんを食べて、安らいで、出ていく時にはリフレッシュしていて、また頑張れる。みんなにとってのもう一つの“おうち”になるようなお店を造ろうと思っています。みんなの支えになって、ちょっとでもいいから幸せを感じてほしい。その気持ちをさらに本を出版することで表現したり、会社でもそんなふうにみんなへ幸せをどんどん届けて、新潟を拠点にして幸せを発信していきたいです。



今泉●大学に入っているんな立場に立ったことで視野も広がったし、4年間という大学の期間はすごく大事だと改めて感じました。大人でもない子どもでもないグレーゾーンみたいな立場で何でもできるし、時間もすごくある。そこで広がった考え方や視野を無駄にしないで、社会に出てから「自分は忙しいからこれは無理だ」と絶対言わない社会人になりたいと思っています。できればボランティアもしたいし、社会に出てからでもやれることは絶対にあるはずなので、それを見つけてどんどん自分を高めて、人の役に立っていきたくてと思っています。



菅野●仕事を通してでも何でも、やることはちゃんとやって、あとは本当に自分のやりたいことをやろうと思っています。今でもやりたいことをやっていますけれども、これで終わりじゃなくて、社会に出てからも自分のやりたいことをやっていきます。海外へ行ってみたり、国内で行ったことがないところに行ってみたり、やり残したこともしていきたい。あと、社会に出てからもやりたいことはもちろん出てくるだろうし、見つければやっていきたいと思っています。



庄司●いろいろな人と出会って自分の価値観を高めたいし、その中で自分を活かせるくらいなと思っているので、誰でもいいからもっといろいろな人と出会って自分を高めたい、自分を成長させていきたいと思っています。

今日は皆さん本当に忙しい中
ありがとうございました。
思い出、就活のこと、将来のこと…
はぐはぐ、いろんな話をしてもらいました。
きっと4年生の熱い気持ちは
在校生に届くと思います！
ありがとうございました。



編集後記

座談会ではカメラマンをやりましたが、4年生の方々の顔には、大学生活を駆け抜けたという安堵感や達成感とともに、社会人という新たなフィールドへの期待と不安が見え隠れしており、とても印象的でした。（會澤）

ざっくばらんな座談会では、1対1での取材とはまた違った盛り上がりがあって新鮮でした。これからも様々な角度から、新大の魅力や学生の活躍を伝えていけたらと思います。（泉）

どの先輩や先生もいずれは卒業や退任なさるので、在校生の皆さんには今のうちに多くの人と大いに語り合ってほしいです。この冊子が、そのきっかけとなりますように。（吉原）

たくさんの素敵なメッセージが詰まった号となったので是非読んでください。（小川）

先輩方の異様(?)な経歴にメモを取ることも忘れ聞き入ってしまいました。ごく一部しか載せられなかったのが勿体無い位濃厚な話の数々。本当にありがとうございました！（鏡）

今回の新大広報はいかがだったでしょうか？個人的には座談会のような多くの学生達が関わるような企画をドンドンやっていきたいと思います。次回も楽しみに!!（馬場）

どーも、いつもアグレッシブ、平成childrenの百瀬です☆座談会ではスタッフとして携わったんですが先輩方の貴重な体験談が聞けてとても勉強になりました。（百瀬）

新潟大学広報センター 学生編集スタッフ

人文学部
行動科学課程 3年
吉原 なつ美

教育人間科学部
学習社会ネットワーク課程 2年
馬場 祐樹

教育人間科学部
芸術環境創造課程 2年
田村 美咲

法学部
法学科 1年
百瀬 和宏

法学部
法学科 3年
泉 和恵

理学部
自然環境科学科 2年
小川 美里

工学部
建設学科 3年
會澤 裕貴

農学部
生産環境科学科 2年
鏡 仁美

歯学部
歯学科 2年
清野 雄多

歯学部
歯学科 2年
境野 才紀

【新大広報 Back Number】 http://www.niigata-u.ac.jp/gakugai/pr/c_forum/

新大広報のバックナンバーは上記のURLから見るができます。また、学務部学生支援課で受け取ることもできます。

新潟大学ホームページ

<http://www.niigata-u.ac.jp/>

2009年早春号 [No.170] ●編集・発行／新潟大学広報センター・新潟大学学務部 ●印刷／(株)第一印刷所